

誕生前第 8 主日 説教 「では、私たちは」 要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022 年 10 月 30 日

マタイによる福音書 13 : 10-17

降誕前第八主日を迎え、早いもので教会暦では、今年もあと一月を残すだけとなりました。そこで、この「終わる」ということから思うことは、焦る気持ちが抑えられなくなるということです。それは、それだけ一生懸命毎日を生きているからでもあります。ただ、一生懸命であるがゆえにまた、私たちは自らを見失うことがあります。そこで、この焦る気持ちにつけ込むのがいわゆるカルトと言われているものでもあります。しかし、人の心の隙間に付け入ろうとしたのは何もカルトに限ったことではありません。明日の 10 月 31 日は宗教改革記念日ではありますが、1517 年、ヴィッテンブルク城教会の扉に 95 箇条の提題を掲げ、宗教改革の口火を切ったのが宗教改革者ルターでありました。終末の中間段階にあると言われている煉獄を、中世の人たちが殊の外恐れ、それに付け入るように教会が贖宥状を乱発したからです。そして、それは、当時の人々が終末における神の審きをそれだけリアリティをもって受け止めていたからでもありました。

そこで、ルターが終末への備えとして語ったことは「たとえ明日世界が滅びようとも、私は今日リンゴの木を植える」というこの言葉でありました。これについては、皆さんも一度ならず耳にされたことがあると思いますが、それは、ルターの語ったこの言葉が、終末に向かって歩む、私たち信仰者の生き方そのものを現しているからです。それゆえ、このルターの言葉は、様々な場面で用いられるのですが、それは、終わりに備え生きることが私たちの信仰においては常に求められることでもあるからです。ですから、ルターの言葉はそのための気づきを与えるものでもあります。それは、この種を蒔く人の譬えも同じです。イエス様が弟子たちに向かって「持っている人はさらに与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまで取り上げ

られる」とこう語るように、それが聖書の語る終わりの日の姿でもあるからです。ところが、この種を蒔く人の譬え話を聞いた弟子たちはどのような反応を示したのか。「なぜ、あの人たちには譬えを用いてお話になるのですか」と、本質からズレた質問をイエス様に投げかけたのです。

それにしても、前段の種を蒔く人の譬え話を聞いた弟子たちが、イエス様に向かって「なぜ」と問うているのはどうしてなのでしょう。それは、結論から申せば、イエス様の仰ることの真意が分からなかったからです。しかし、弟子たちがここで「なぜ」と問うているのは、イエス様の言葉の意味、その内容が分からなかったからではありません。むしろ、その逆です。弟子たちには、イエス様が譬えをもって何を仰りたいかは分かっていたのです。なぜなら、「終わり」についてのイエス様の見解は弟子たちもすでに聞いていることですし、そもそもそのころで言えば、終末の訪れについては、ユダヤ人であれば誰もが知っていることでもあるからです。ところが、弟子たちはその上でここでは「なぜ」と問うているのです。それは、弟子たちが群衆に対するイエス様の振る舞いが気になったからです。それは、自分たちがこれまでただ一度として聞いたことのないこの種を蒔く人の譬え話を「なぜ」群衆に語ったのか、自分たちが知らない知恵を群衆に授けるという行為、その特別な態度に弟子たちは納得することができなかったからです。

従って、弟子がその師に対し、このような形で不満を訴えることは常識的にはいかなるものかとも思います。心の中で思うまではいいとしても、ここでは、それが許されるほどの理由は見つかりません。ただ、納得がいけないとは言え、弟子たちはそうまでしてどうして「なぜ」と尋ねなければならなかったのか。そこで言えることは、弟子たちとイエス様との近さ、距離感がそ

こに関係しているということです。それは、イエス様とこれまで長い時間を共に過ごしてきた弟子たちであります。この時、イエス様との関係が深まり行くのを感じ始めていたからです。まただから、御言葉もそれを伝えるために「弟子たちはイエスに近寄って」と語るわけです。そして、この近さであります。それは、前段の2節で「イエスは船に乗って腰を下ろされた」とあるように、手を伸ばせばすぐに届くほどの距離にあったということです。従って、殊更「近づいて」と語るまでもない距離にあったのが弟子たちでありました。けれども、御言葉はあえて「近寄った」と語るのです。それは、弟子たちがイエス様との距離が近づいたことを感じ始めたその一方で、この「なぜ」との問いかけが示すように、弟子たちがこの近さゆえにまた、イエス様との間に距離を感じてしまった、弟子たちの苛立ちの原因はここにあったということです。

このように、イエス様に対する距離感の近さが弟子たちをして「なぜ」と問わせることになったわけですが、従って、ここで明らかにされていることは、その師に向かって「なぜ」と問うことの赦された関係性であったのがこの時の弟子たちであったということです。では、その弟子たちに向かって、イエス様はなんと仰ったのか。イエス様が先ず語ったことは「あなたがたには天の国の秘密を悟ることが許されている」というこの一言でありました。このことはつまり、この距離感の近さは弟子たちの一方的な思いではなかったということです。イエス様もまた弟子たちをことごとく近くと感じていた、しかも、この近さは特別なものでもありました。秘密を打ち明けるほどの関係であったからです。そして、この特別な関係性について、イエス様はさらにはっきりとこう仰るのです。イエス様は「あの人たちには許されていないからである」と群衆についてこう語るのですが、このことはつまり、イエス様の中には「あなたがた」と「あの人たち」との区別がはっきりとしていたということです。そして、この区別は徹底したものでもありました。「持つ

ている人はさらに与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまで取り上げられる。だから、彼らには譬えを用いて話すのだ。見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからである」と、イエス様にとって弟子たちが特別な存在であることを伝えようとして、イエス様は譬えをもって語ったその真意をこのように包み隠さず語ったのです。

ですから、イエス様と私たちとの関係性について考える上で、ここから学ぶところは多いように思います。中でも、学ぶべきは、私たちとイエス様との近さ、その距離です。もちろん、親しき仲にも礼儀ありと言われてるように節度は大事です。何を言ってもいいということではありません。けれども、その反対に何も言えないというのは困ったものです。そこで、思い出すのは小さい子どもの言動です。目に涙を一杯に溜めて、「お父さんの馬鹿、お母さんなんて大嫌いだ」と、自分の思い通りにならない時、小さな子どもが親に向かってこう悪態をつくのを見ることがありますが、そのような時、もちろん、言葉遣いについては、大人はきちんと教えてあげる必要があります。けれども、そこで子どもにとって大切なことは、厳格に対処することではありません。言うてはいけないことがあり、それを口にしないようにさせるという技術的な問題も大事なことはありますが、それ以上に大事なことは、そうした言うてはいけないことを口にし、いや、口にすればこそ、子どもはもっと大切なことを学ぶことになるということです。それは、親との関係性が揺るぎないものであるということです。なぜなら、この口にしていけないことを口にするという、この率直な感情表現を通して、子どもは、親が親であることを本当の意味で学ぶことになるからです。

そこで、御言葉に戻りたいのですが、弟子たちの「なぜ」との問いかけは、私たち大人の常識からすれば、あってはならないことであり、失敗の部類に振り分けられるものでもありました。けれども、イエス様は諭すことすらせずに弟子たちの気持ちを受け止め、群衆には語らなかつたさらにその

奥にあることを伝えたのです。そして、そこで伝えられた内容も大事なことはありませんが、もっと大事なことは、この失敗を通して、イエス様と弟子たちの関係性が一段と深まったということです。成功体験の共有よりも、失敗の共有の方がより人と人とを近づけると、世間一般でも言われているように、人と人との関係性においては、失敗は無意味なことではなく、意味のあることでもあるのです。ただ、もちろん、だから、失敗してもいいということではありません。図らずも失敗するようなことがあっても互いに素直に正直に向き合える関係性、それが維持されていてこそ、人と人との絆は太く強くしなやかなものとなるのです。ですから、私たちはこの関係性を大事にしよう、したいと思います。そして、この大事にしたいという気持ち、そのための振る舞いを愛と呼んだりもするのですが、つまりは、失敗を共有できる関係性はこの愛ゆえのものであるということです。だからこそまた、主に在る私たちの関係性は、時間を経るに従って、深まりを見せることにもなるのです。

そして、イエス様がその次に語ったことはイザヤ書の御言葉でもありました。それは、先に話した「あなたがた」と「あの人たち」とをはっきりと区別させるためでもあります。それは、イエス様にとって弟子たちが特別な存在であるがゆえに、終末に備え、神の民の失敗から多くを学ぶ必要があると考えたからです。しかも、それが深まりつつある関係性の中で語られていることを思いますと、イエス様がそこで語ろうとしていることは、誰もが語れる紙の上の知識ではなかったように思います。そういう類いのものとは性質の異なる、関係性の更なる深まりを願うものであり、つまりは、弟子たちに向けられたイエス様の思いのすべてを、この大きな失敗を通しイエス様は伝えようとしたということです。そして、それは、神の民に受け継がれてきた「知恵」であり、生きるための知恵、生き抜くための知恵でもありました。イエス様はこの「知恵」をこの大きな失敗を通し弟子たちに伝えようとしたのです。それ

は、御言葉に「神を畏れることは知恵の初め」とあるように、「あの人たち」と「あなたがた」とを区別する上で必要なものが神様を恐れ敬う心、つまり、知恵が必要だと考えたからです。このように、イエス様はこの神様の「知恵」を弟子たちに与えようとしているのですが、けれども、それは、弟子たちに優越感を与えたかったからではありません。

先ほど失敗の共有について少し触れましたが、民としての大きな失敗を共有していたのがイスラエルの民でありました。それゆえ、この認識においては、イスラエルの人々の中で差はありません。ならば、この大きな失敗を通してイエス様は弟子たちに何を伝えようとしたのか、失敗を通してイスラエルが知ったことは、インマヌエル、神共にいますことでもありますが、けれども、それがよく分からなくなっていったのがイスラエルのその後の歴史でもありました。けれども、バビロンから帰還して500年後、人々はそのことを具体的に知ることになったのです。それが、イエス・キリストの出来事でありました。

そこで、イエス様は、神共にいます現実のそのままを現すために、最後にこう仰います。「あなた方の目は見ているから幸いだ。あなた方の耳は聞いているから幸いだ。はっきり言うておく。多くの預言者や正しい人たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなた方が聞いているものも聞きたかったが、聞けなかったのである」と。そして、それが、「今、この時、この場所で、あなたがた」が見て、聞いていることであり、それがイエス様がここで「天の国の秘密」と仰っていることでもあるのです。そして、このイエス様のお言葉を引き出したものがイエス様に「なぜ」と問う弟子たちのまっすぐな気持ちでもありました。それは、このまっすぐさこそが聖書の中で語られている神の民の伝統でもあるからです。

「なぜ」、「どうして」と、整理すらできないその気持ちを、まっすぐに、正直に、素直にぶつけることを望んでいるのが父なる神様でもありました。ところが、イ

スラエルはその気持ちをまっすぐに神様に向けるのではなく、他のものに向けてしまったのです。それは、人の世の様々な現実と折り合いをつけるためでもあります。ただ、そうした現実的な判断を導く際、人々の中に神様に向けられたまっすぐな気持ちはどこにも見出すことはできませんでした。バビロン捕囚はその結果であり、それは、イスラエルが神を見失ったからでもありました。ですから、イスラエルが神の民として終わりの日を目指し、まっすぐに歩み続けるためには、神を畏れ敬う心が必要なのです。そして、それは、イエス様をまっすぐに見つめることであり、この素直でまっすぐな気持ちが私たちの身に備わり、養われ、深められるためには、そのようにイエス様のお言葉に聞き、幸いな関係性に止まり続ける必要があるのです。そして、それが、今、この時、この場所で、あなたがたには許されている、イエス様が仰りたいのはこのことです。

ここでの弟子たちと同じように、私たちもまたイエス様に「なぜ」と問う、この失態を重ねるしかないのでしょうか。その時、私たちはどうするのか、ここでの弟子たちのようにまっすぐにイエス様を見つめるのか、それとも、言い逃れを繰り返す、この世とうまく折り合いをつけることだけを考えるのか、あるいは、原因と思しきものを見つけ出し、現実的に即して正しいと思う結論を無理矢理導き出そうとするのか、バビロン捕囚という大失態がいずれを選ぶべきかを私たちに教えてくれているのですが、ただ、イエス様が私たちに教えようとしていることは、正しい答えを選び取ることだけではありません。弟子たちの信仰がいつまでもどこまでもまっすぐであり続けることがなかったように、このまっすぐさを最後まで保ち続けられないのが私たち人間でもあるからです。

私たちが「終わり」を迎えるために必要なことは、神様に向けられたまっすぐな眼差しであり、それを保ち続けることこそが大事なことでもあるのです。ただし、それに失敗したのが弟子たちでもあります。では、そのために私たちはどうすればいいの

か。それは、「なぜ」と問い続けることです。むしろ、「なぜ」と問うべきだし、そうイエス様に問いかけていいのが私たちでもあるからです。なぜなら、イエス様との関係が深まるのは、不遜とも思える、この「失敗」を通じてのことでもあるからです。ただし、この「失敗」を受け止めるために「なぜ」と問い続けることは容易なことではありません。厳しいものであり、痛みを覚えるものでもあるのです。けれども、痛みを覚え、つい口についてしまう「なぜ」との繰り返しの中で、私たちは知らされるのです。それは、イエス様と神様との関わりが深まっていくのを知らされるのです。終末が私たちにとっての喜びのときであるのはそれゆえのことでもあります。それは、この終わりの時を私たちはイエス様から遠く離れたところで迎える者ではないからです。

「終わりの日」、私たちはぽつんと一人だけでその日を迎えるわけではありません。イエス様と共に、イエス様の中で、イエス様に一番近いところでその日を迎えるのが私たちなのです。まただから、イエス様はその日までをこうして共に礼拝を献げ、共に主の聖餐を分かち合い、共に祈りを合わせ、互いに愛をもって過ごすようにと、私たちに求められるのです。それは、そこにイエス様の姿を常に見出し、イエス様のその声を必ず耳にすることになるからです。つまり、そのような関わりの中に生きているのが私たちであり、まただから、イエス様という神の国の奥義を知らされている私たちは、「なぜ」との問いを発すればこそ、互いに愛をもってイエス様との関係性を深め、その終末に向かっての歩みをより確かなものとするのです。ですから、終わることを恐れるのではなく、終わりまでを私たちと共に歩んでくださるイエス様に感謝し、喜びの中にその日を迎える私たちがありたいと思います。祈りましょう。